

《響き》と《ひねり》の言葉—新カント学派と現代価値論との対話

氏名 Kazuto KUKI

所属 岡山商科大学

情動が事物（／関係）の性質を表象するさい、情動と身体的変化との間の相関関係が根底をなす、といわれることがある（Prinz, J. 2004 etc.）。ここから情動の非認知説は、狭義の情動とは区別された価値判断の必要条件を情動の身体性に求める。それを批判しつつ、新カント学派的な認知モデルの価値判断説——価値関係の手続きの根底にある客観的／普遍妥当的な評価ならば、妥当する命題に由来するとする——を押し込めよう。ちなみに新カント学派の場合、二重判断（表象結合＋態度決定）の結合を強調すれば、認知説に傾き、二重判断の分離を強調すれば、それは感情説に傾く。一般に（Solomon, Nussbaum 等の）情動の非身体説（認知説）の場合、価値的性質（判断内容）の二重判断的措定（判断形式）という新カント学派の立場と整合的に理解することが可能である。こうした新カント学派と現代価値論との対話の作業をとおして、個々の情動感受より一般的な、価値判断の体系のアイデアを構想したい（信原幸弘 2017 / Nussbaum, M. 2001, 2004 を参照する）。特殊な情動は、記述の外延に即して、《響き》の言葉と呼ぶ体系的な価値判断に成形されると考えよう。この《響き》=Klingen という表現で、体験が反《響》して価値が増幅することを照射したい。そして期待効用（価値）の大小と、情動を支配する新奇性原理・親近性原理を結びつけて考えたい。この視点は、新カント学派が説く目的合理的=帰結主義的／価値合理的=非帰結主義的な選好（鈴木興太郎, 2009）に接続する。さらに《響き》という価値判断を引き継ぐかたちで、記述の内包に即して体系化がなされることがある。さしずめ、その価値判断を《ひねり》=Drehung の言葉と呼べば、これらをつうじ新カント学派的な普遍妥当的〔非身体的な〕価値に至るのである。そこで一種の「技巧」が加わる。例えば泥の皿を食べることを見てみよう。主体 S_1 は $f_1(x)$ 「食べることなぞ突拍子もつかず、その逸脱は相対的に貶められる」という《響き》をもつかかもしれない。主体 S_2 は $f_2(x)$ 「食することはほぼ脅迫に近いものとして、相対的に貶められる」という《響き》をもつかかもしれない。ここで「標準」との相関関係において、例えば S_1 の価値判断が捉えられる。「考えもつかないジョークを帯びたアートの価値を賦与すべきである・ $f_1(x)$ を $f_2(x)$ よりも選好する」という $f_1(x), f_2(x)$ を架橋する解釈のもとで、《ひねって》価値判断が措定されるなら、 $f_1(x)$ が帯びる価値が増幅することになる。一方で《響き》が帰結主義的な親近性に則して、固定した価値体系に準拠しているほど、《ひねり》の言葉のなかでも、ありふれた価値判断《響き》が映える。他方で《響き》が非帰結主義的な新奇性に準拠しているほど、意外な《ひねり》によって、かけがえのない逸脱例の価値判断《響き》が鮮明となる。